

『春淫狩り ―パブリックスクールの獣― 番外編』

著：高月紅葉

ill：笠井あゆみ

緊張感を漂わせる静寂の中に、ペンを走らせる音とキーボードを叩く音が共存する。

四方を書庫に囲まれた吹き抜けの自習スペースは、古めかしいパブリックスクールとはまるで違い、近代的だ。

重厚な亜麻色の長机は見慣れた雰囲気だが、そのそれぞれに電源タップがついている。そして、左右をついたてで仕切られていた。多くのイスは自主学習に励む学生で埋まっている。

ローレンス・シーゲンバーグは、腕に巻いた時計を見た。時刻を確認して、帰り支度を整える。

金色の髪がさらりと流れたのを、長い指先でそっと押さえる。長い前髪を耳にかけた仕草は、きめ細やかな美貌に似合い、手を止めて見入る学生たちの心を揺さぶった。

しかし、黄金律で作られた芸術作品のような彼自身はまるで頓着しない。

パブリックスクールの頃から、そうだった。オーダメイドのテイルジャケットにボウタイ。グレーのウェストコートとピンストライプのグレースラックス。

監督生であり、寮代表にして副生徒代表。

絹糸のような金髪に、神秘的でさえある董色の瞳。

外見だけでなく、内側からも輝くように晴れやかな美貌と品位から、『春の王』とも呼ばれた。別名を『ミスター・バイオレット』。

そのふざけた呼び名は、大学へ進んだいまも健在だ。

テイルジャケットを脱ぎ、なにげなさを装った濃青のカーディガンを着ていても目立つ。

校内を歩けば、みんなが振り向く。ローレンスのあとには董が香ると言われているほどだ。

だから、影の呼び名『ミスター・バイオレット』は現役で使われている。広めたのは、彼と同じ学校の卒業生たちだった。

静かに退席して、図書館を出ると、どこからともなく学生が湧いて出る。

「やあ、ローレンス。偶然だねえ」

そう言いながら肩に手を回され、ローレンスは足を止めた。睨まずとも良かった。ちらりと視線を向けるだけで、先輩たちはおずおずと距離を作って離れる。

彼らがどれほど親密さをアピールしても、ローレンスの心の壁は高い。そして頑強だ。そもそも、そんなアプローチを好まない。

「今日は金曜日だろう？ 予定がなければどうだろう」

「俺たちと、クラブのイベントとか」

「是非、ご一緒に！」

三人のうち一人は、パブリックスクールで同寮だった上級生だ。むげにはできないが、媚びを売る必要もない。

ローレンスは髪を一振りして、ほんのわずかに微笑んで見せた。正確には、微笑みに似た表情を作っただけだが。

男たちは一斉に押し黙り、息をするのを本当に忘れてむせかえる。

「金曜日に先約がないと思うんですか？」

ローレンスは肩を上下させて、三人の男たちを軽くいなすように見渡した。

「じゃ、じゃあ、来週は？」

「その次の週でも！」

相手もなかなか執拗だ。キャンバス地のバッグを肩からさげたローレンスは首を傾げた。年上への礼儀として、考える振りをする。

「ああ、やっぱり先約が……。ですから、失礼します」

最後は素っ気なく言った。礼儀を尽くしても、期待を持たせては意味がない。彼らに背を向け、颯爽と歩きながら、カーディガンの中に着ているシャツのボタンをもうひとつはずす。

瞳と同じ色のボタンダウンシャツは、恋人から贈られたものだった。彼はよほど、この色が好きらしく、一緒に暮らしている家には淡い紫色が溢れている。

自分の瞳を鏡でしか見たことのないローレンスには不可思議な光景だ。それでも、相手が喜んでいるのなら文句はない。

ただ、紫色の花ばかりを集めたプランターを窓辺に置く計画だけは阻止したい。

まず、意味がわからない。あの男には、精悍な顔立ちに似合わないところがあると思う。ローレンスは笑いを噛み殺した。

すれ違った女子学生が植え込みに足を突っ込み、また別の男子学生は石畳につまづいて転ぶ。それもどこ吹く風とリズムカルに足を運び、ローレンスは約束の場所にたどり着く。

時間より十分も早いのに、彼はもうそこで待っていた。

ウェルズリーコレッジの、元生徒代表。

こげ茶色の髪に落ち着きがあり、長い手足と広い肩、引き締まった体格は洗練されている。理知的な瞳は、凍りつく前の湖のようにひんやりと静かだ。

ローレンスが『春の王』なら、彼は『冬の王』だった。ふたりはいつも並び称され、甲乙つけがたい双璧だともてはやされた。

そういう遊びが好きな年頃なのだ。

パブリックスクールの窮屈さには、仰々しい空想の世界がよく似合う。ほんのひとときの『ごっこ遊び』だ。

冬の王と呼ばれた彼は、枯れ葉が舞う並木道のベンチに座り、長い足を持って余すことなく洒脱な仕草で組んでいる。あごを引いて読書に耽った彼は、まるで一枚の絵に見える。

首にぐるぐると巻いたマフラーがどこか少年めいていたが、表情は成長しきって、二度と元に戻らない。ローレンスには、それがよかった。

彼は毎日、新しくなる。目覚めて一番に顔を見るたび、昨日の彼は遠くへ行き過ぎて、どこに

もおらず、真新しく羨みを増した大人の男が生まれているのだ。

彼の名前は、クリフォード・ロチェスター。ローレンスと共に貴族階級であるアッパー・クラスに属する。

同じ家柄に生まれたふたりの違いは、クリフが跡継ぎの長男で、ローレンスは次男坊ということだ。両家の父親もウェルズリー校の卒業生で親友同士。息子たちの関係は、黙認と公認の中間に位置している。

前途多難な同性カップルになるはずだったが、ローレンスの預かり知らぬところで、彼の兄であるアルバートとクリフは結託し、すでにさまざまな密約が交わされていた。

長い長い片想いをこじらせていた間にも、クリフは着々と恋人同士になった後の準備を進めていたことになる。

クリフォード・ロチェスターとは、そういう男だ。

晴れて想いが通じ、恋人同士になったのは、まだパブリックスクールの学生だった去年の春。あれから一年と少しが経ち、ふたりは大学二年生になった。入学当初から寮に入らず、アパートの一室をシェアしている。表向きには同居でも、実態は同棲だ。

ふたりきりの部屋。ふたりきりの生活。ふたりきりの夜。そして、ふたりきりの朝。そのすべてがローレンスの日常だ。美しくて、ほんの少し、はかない。

と、思うたびに、クリフはそばへ近づいてくる。そして、ローレンスの感傷にさっと手を加え、はかない感情を確かな想いでくるんでしまう。

日々は過ぎていくものだが、消えていくのではなく、積み上がっていくのだ。ふたりの間にあるものは春の日差しに消えゆく積雪ではなく、春夏秋冬を越えて蓄積していく枯れ葉の地層だと、クリフはいつも、愛情を持ってローレンスに伝えてくる。

なにを信じられなくても、クリフただ一人を信じていればいい。そうすることが、ローレンスを確固たる自信に満ちた人間たらしめる。クリフもまた、そんなローレンスのそばに立つことが幸福であり、成長の糧だった。

自分のくちびるを撫でながら本を読んでいたクリフが、視線を落としたままで時計を見る。まだ約束の時間にはなっていない。それでも振り向き、歩み寄るローレンスに気づく。

「やあ」

軽く手をあげて見せると、クリフは小さくうなずいて、本を閉じた。

「レポートはどう？ 進んだのか」

本を足へと押しつけたクリフが見上げてくる。その仕草は、家にいるときと変わらなかった。彼は小説を読むのが好きだ。ローレンスがねだると、ときどきは朗読をしてくれる。

その節回しは繊細で甘く、官能的でもあって、内容よりもクリフの声の方がずっとずっと魅力的だ。だから、内容がすっ飛んでしまうことも少なくなかった。

でも、聞いていないわけじゃない。聞いてはいるのだ。ただ、一番興味深いのは、書かれている言葉でも内容でもなく、読み上げるクリフの声と息づかい。それだけのことだ。

「進んだよ。少しは。そっちは新しい本だね」

「新刊が出てたんだ」

「そう。読み切ってしまいたいなら、今夜は……」

「金曜日なのに？」

クリフの凜々しい眉が、信じられないとばかりに跳ねた。

「ディナーは明日でも」

「そんなことを言って、クラブにでも繰り出すつもりだろう」

「だれが……」

あきれたように言って肩をすくめると、

「じゃあ、予定変更はナシで」

ペーパーバックの小説本を片手に立ち上がったクリフの手が、ローレンスのバッグの持ち手を掴んだ。

「荷物を入れるから」

そう言ってバッグを引き取り、小説本を中へ入れる。代わりに渡されたのは、ドキュメントファイルだ。重さの違いは一目瞭然だが、いまさら荷物の取り合いはしない。

ふたりがいるときは、重い方の荷物はクリフが持つ。それが暗黙のルールだ。

不満なら俺を持っていてくれと手のひらを出されたことがあるので、逆らわないことにしている。面白がったクリフに手を握られ、逃げ回るのに苦労したのだ。

「マーケットに寄って、必要なものを買い足そう」

実はいたずら好きなクリフの手が、ローレンスの背中をそっと押し出して促す。

「メモは？」

「撮ってきた」

ポンと叩いたのは、ズボンの後ろポケットだ。携帯電話が入っている。

「さすがだね」

ドキュメントファイルを小脇に抱えて、ローレンスはほころぶような笑顔を浮かべた。褒めて欲しそうなクリフの顔が可笑しかったからだ。そんな表情を、自分にしか見せないことも知っていた。

ここが家の中だったなら、頬とあご裏をそっと撫でてくすぐり、ご褒美のキスもしてやるころだ。彼のためではなく、ローレンス自身のために。

「俺から、しょうか」

わずかに背の高いクリフが、おどけて耳打ちしてくる。

ローレンスに彼のことがよくわかるように、クリフもまた恋人の些細な表情の変化を見逃さない。

キスがしたくなったことは、すっかり見透かされている。

「食事のあとにしてくれ」

ローレンスは素っ気なく言った。

今夜は楽しい金曜日だ。この一週間の勉強疲れを忘れるため、テレビの料理番組で見たメニューをふたりで作ることになっていた。

そのために、食材のメモまで取ったのだ。

目的を果たす前にキスしてしまったら、予定がすべて飛んでしまう。そんなことはこの一年の間に、何度もあった。

それはそれで楽しいアクシデントに違いないのだが、ローレンスはどうしても、テレビで見たメニューをあきらめきれない。インターネットで新しいナイフを買ったし、いままでよりも大きいカッティングボードも買った。番組の中で、皿の代わりにしていたからだ。

「ただいまのキスは？」

前を向いたクリフは、なにげない振りを装って言う。

「それは、キスに入れないで」

ローレンスもまた、世間話のように答えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>